

仏教に基づく道德教育と人間形成

第三回：日本の道德思想

同朋大学
岩瀬真寿美

- 日本の道德思想の重層性を知ることができる。
- 「古代日本、中世日本、近世日本に特徴的な道德思想を知ることができる。」

- 日本の道德思想
 - ・ 神道、儒教、道教、仏教、カトリック、プロテスタントなど諸宗教が影響
 - ・ シンクレティズム (syncretism, 混淆宗教、多層宗教、習合宗教)
- 古代から江戸時代に至る中で、日本人に影響を与えた道德思想
- 近代の日本の知識人は、西洋思想を重視し、日本の伝統思想を無視
- 日本的な徳の再評価
- どのような道德性が日本的な道德性であるのか
 1. 古代日本におけるカミへの信仰
 2. 中世日本における神仏習合的道德思想
 3. 近世日本における儒教的道德思想
 4. 近世日本における神道と仏教

古代日本におけるカミへの信仰

- 山、川、草、木、鳥、獣、虫、魚など様々なものにカミの表れを見る
 - ・「八百万の神々」
 - ・自然と対立ではなく豊かな自然と融和する感情
 - ・一切の存在に生命や神性を認めるアニミズム（animism）
- カミに対して偽りのない心：「清明心」：「まこと」の心
 - ・「まこと」：言葉と行為とが一致していること。
 - ※合田秀行「日本人の人間観」大正大学総合仏教研究所「仏教的人間学」研究会編『仏教の人間観北樹出版、2007年
 - ・道徳科の内容項目において、正直・誠実というキーワードで言い表せられる徳
 - ・稲作文化を続けるため：集団の和を尊び、勤勉で合理的な生活態度が形成
 - ※杉原誠四郎『日本の神道・仏教と政教分離——そして宗教教育』文化書房博文社、1992年

古代日本におけるカミへの信仰

● 古代の人々の「穢れ」（けがれ）概念

- ・ 秩序・規範に対する違背行為がもたらす罪
- ・ 自然が避けがたく生じさせる死や出産にまつわる死
- ・ 穢れ：取り除くことができるもの
- ・ 罪を清める儀式である祓い（はらい）、穢れを水によって清める禊ぎ（みそぎ）

※赤坂憲雄「穢れの世界史」『岩波講座 東洋思想』第16巻、1989年

● カミ：目に見えないが感じられる存在

- ・ 「日本の多神教は、その初発の段階においては、肉体性と個性を欠落させた、不可視の膜に覆われる多神教であったといっている」

※山折哲雄「カミ——その変容と展開」『岩波講座 東洋思想』第15巻、1989年

- ・ 日本のカミ：絵画や彫刻にも表されるものではなかった

古代日本におけるカミへの信仰

- カミ：「魂（たま）」：人々の祈願や意向に応じて特定の事物や場所に鎮座
- 6世紀頃に仏教が入ってくると、「死霊→神」から「死霊→仏」へ
※佐々木宏幹『神と仏と日本人——宗教人類学の構想』吉川弘文館、2010年
- 近代以前の日本：死と生は密接に結びついていた
- 靈魂にあたる古語「たま」：人格が発する力の源泉の意味
- 古代の日本人が考えた人間の心の構造
 - ・ 「たましひ（たましい）」は、特有の気が周囲に放散されているイメージ
 - ・ 「たま」は「たましひ」のはたらきの奥にある※湯浅泰雄「かたち——日本思想の深層」『岩波講座 東洋思想』第16巻、1989年
- 道徳科の内容項目：生命の尊さ、自然愛護、感動・畏敬の念
- 美しいものや気高いものに感動する心：様々なものの中にカミを見た

中世日本における神仏習合的道德思想～仏教の導入と「因果応報」思想

● 仏教

- ・ 六世紀頃に朝鮮経由で日本に伝来：自発的な導入
- ・ 紀元前5世紀に誕生した釈迦が創始した宗教、世界宗教として広まった
- ・ この世を苦しみの多い世界と見て、そこからの解脱を志向するための修行法を説く
- ・ 「因果応報」思想（善因楽果、悪因苦果）：民衆に浸透
- ・ 六道輪廻（ろくどうりんね、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）の思想

● 道徳科の内容項目：善悪の判断・自律・自由と責任

- ・ 「因果応報」思想の認識と関連が深い
- ・ よいと思うことを進んで行うということ

中世日本における神仏習合的道德思想～仏教の導入と「因果応報」思想

● 「菩薩」（ぼさつ）の概念

- 一人の悟りではなく全体の救いを願う
- あらゆる衆生の福利のためにどこまでも献身しようと心に決めた者たちのこと

● 聖徳太子（574-622）

- 『三教義疏』（さんぎょうぎしょ）や法隆寺建立で名高い
- 『勝鬘經』（しょうまんぎょう）や『法華經』（ほけきょう）の講説をおこなったことについては、疑う説が強い
※大平聡『日本史リブレット人004』山川出版社、2014年
- これらの経典は「菩薩」思想の特徴をもつ大乘経典

中世日本における神仏習合的道德思想 ～仏教の導入と「因果応報」思想

- 聖徳太子の『憲法十七条』：和の精神が重要

「一に曰く、和ぐを以て貴しとし、忤うること無きを宗とせよ。」	協調性
「六に曰く、（中略）人の善をかくすことなく、悪を見ては必ず匡せ。」	勧善懲悪
「九に曰はく、信はこれ義の本なり。事ごとに信有るべし。」	信義
「十に曰く、忿を絶ち瞋を棄てて、人の違うことを怒らざれ。」	寛容
「十四に曰く、群臣百寮、嫉み妬むこと有ることなかれ。」	嫉妬抑制

- 和の精神や協調性：道徳科の内容項目の相互理解・寛容
- 親切・思いやり・感謝
- 『憲法十七条』は、人との関わりに関することを強調

- 奈良時代に聖武天皇（724-749）が全国に国分寺・国分尼寺をつくった
 - ・ 鎮護国家を目的とする国家仏教
- 都の仏教：国家の財政的援助にもとづいて、中国の高度文明を受け入れる社会的文教的機能を果たした仏教
- 山の仏教：多くの修行者たちが、日本各地の山々に入りこんで、仏教の修行法を実践
 - ※湯浅泰雄「かたち——日本思想の深層」『岩波講座 東洋思想』第16巻、1989年
- 女性の僧である尼：仏教受容において重要な役割
 - ・ 仏教における男性と女性の平等な活躍が実践されていた時代
 - ※勝浦令子『日本史リブレット16 古代・中世の女性と仏教』山川出版社、2003年

- 最澄（767-822）：天台宗
- 「一切衆生悉有仏性」（いっさいしゅじょうぶっしょう、一乗思想）：平等性に着目
 - ・ 「人間はその本質に於て尊厳であり、平等であり、永遠の可能性を蔵する」という点に人間の価値を認識
 - ・ この認識は合理的、科学的次元を超えた次元における価値の把握であり承認
 - ・ 人間を対象とするだけでなく、自然界をも対象※井上義巳『日本教育思想史の研究』勁草書房、1978年
- 一乗思想
 - ・ 人間も自然も大生命の中の存在という意味で異なることがないと捉える
 - ・ 道徳科の内容項目における、公正・公平の念・生命の尊さ・自然愛護

- 空海（774-835）：真言宗
 - ・ 高野山金剛峰寺を創建し密教を主導
 - ・ 平等生の哲学：すべてのものは大日如来の表れである
 - ・ 「十住心」：心の十段階、仏教の諸宗派や仏教以外の儒教なども包括的に寛容的に捉えた
- 本地垂迹説（ほんぢすいじゃくせつ）
 - ・ 仏が本地（真理の本体）で、神は垂迹（本体が形となって表れたもの）という考え方
 - ・ 本・迹は、根本的な本質と、それが現象世界に現れたものの意味
 - ※末本文美士『鎌倉仏教展開論』トランスビュー、2008年
- 「仏教の伝来は、目に見える仏・菩薩と目に見えざる神々との遭遇という事態をひきおこした」
 - ・ カミ：目に見えず感じられるものであった仏教：仏や菩薩など多種多様なイメージ
 - ・ 神道と仏教を結びつけるのに大きな役割を果たした。
 - ※山折哲雄、前掲、1989年 湯浅泰雄、前掲、1989年

中世日本における神仏習合的道德思想 ～最澄と空海の仏教における平等性

- 日本では歴史的にカミとホトケを同質のものと見る（「神仏」という言葉）
- 仏教と神道を一つに融合させた心理的条件
 - ・ 霊的世界についての体験と信仰
 - ・ 怨霊の鎮魂：中世の日本仏教で、はじめて祖先の供養が仏教の要素となった
※湯浅泰雄「かたち——日本思想の深層」『岩波講座 東洋思想』第16巻、1989年
- 七世紀後半から平安時代までの間に、独自の神話と祭祀体系が形成
- 神道に関する教義的な体系が形成されたのは鎌倉・室町期
 - ・ 宗教体系を、自ら「神道」と呼ぶようになった
 - ・ 仏教伝来によって、日本古代の神道の輪郭が明らかになってきた
 - ・ 仏教が入り始めた頃に、神社建築も始まった
※末木文美士『日本史リブレット 中世の神と仏』山川出版社、2003年

- 源信（942-1017）

- ・ 『往生要集』（平安時代中期から後期）
- ・ 西方極楽浄土への往生を願う貴族が支持
- ・ 鎌倉期の新仏教の母胎をつくった

- 平安時代末期：戦乱や天災のなか人々は無常を感じる（末法の時代）

- ・ 道徳科の内容項目「真理の探究」：真理の1つに世界を無常と見る見方
- ・ 生れてから絶えず死への道のりを歩む。そこには一時の停滞もない。

鎌倉新仏教における民衆のための信仰

- 反本地垂迹説（はんほんぢすいじゃくせつ、神が本地で仏が垂迹）
 - ・ 鎌倉時代、神道高揚の精神を示す
 - ・ 一つの神仏習合の捉え方

法然 (1133-1212)	浄土宗をひらき、専修念仏（せんじゅねんぶつ）の道をひらいた
親鸞 (1173-1262)	浄土真宗の祖となり絶対他力の信仰をひらいた 悪人正機説（あくにんしょうきせつ）を唱えた
道元 (1200-1253)	曹洞宗をひらき、只管打坐（しかんたざ）の修行を提唱 坐禅を悟りを得るための手段ではなく、それ自体を目的と捉えた 「修悟一等」（しゅうごいっとう）：修行と悟りが不離一体であること
日蓮 (1222-1282)	日蓮宗の祖となり「南無妙法蓮華経」（なむみょうほうれんげきょう）と唱える 唱題を提唱

鎌倉新仏教における民衆のための信仰

- 鎌倉新仏教：民衆のための信仰を提唱（平安時代の浄土教は貴族や僧を対象）
 - ・ 道徳科の内容項目における公正・公平の念
 - ・ 貴族や僧だけが恩恵にあずかるのではなく、すべての人々が安心できる世界をつくりたい
 - ・ 鎌倉新仏教の宗祖：菩薩の働きを各々が体現
 - ・ 不安定な時代：末法思想の広がり
- 宗教は芸術や心情にまで影響（茶道、華道、能など）
 - ・ 栄西（1141－1215）：茶の普及に貢献
 - ・ 千利休（1522－1591）：「わび茶」の茶道を大成
- 鈴木大拙（1870-1966）：世界的仏教哲学者
 - ・ 禅と美術、禅と武士、禅と剣道、禅と茶道、禅と俳句等
 - ・ 日本の伝統文化は「形」や「型」を重んじる特性がある※鈴木大拙『鈴木大拙全集』第十一巻、岩波書店、1970年
- 中国の唐音・宋音
 - ・ 「饅頭（まんじゅう）」、「蒲団（ふとん）」、「暖簾（のれん）」、「行脚（あんぎゃ）」※袴谷憲昭『日本仏教文化史』大蔵出版、2005年

鎌倉新仏教における民衆のための信仰

- 鎌倉時代以降になると復興をし、新しく尼寺を創建する動き
※勝浦令子『日本史リブレット16 古代・中世の女性と仏教』山川出版社、2003年
- インドや中国では仏教はほとんど滅んでしまった
- 日本においてはこの時代の仏教は現代にまで受け継がれている
- 「近代以前の日本の伝統文化の底層は、ムラの宗教としての神道とイエの宗教としての仏教という二本の柱によって支えられてきた」
※湯浅泰雄「かたち——日本思想の深層」『岩波講座 東洋思想』第16巻、1989年
- 近代以前の日本人の道徳性：神道と仏教に基礎づけられる

近世日本における儒教的道德思想

- 「世俗化」 (secularization)

- ・ 近世は儒教が主流：仏教的な神道から儒家神道への移り変わり
- ・ 「聖」が「俗」の上にあったのが、「俗」が「聖」の上に立つ
- ・ 合理主義的思考の誕生

※湯浅泰雄「かたち——日本思想の深層」『岩波講座 東洋思想』第16巻、1989年

- 必然的に儒教が仏教や神道に代わった

近世日本における儒教的道德思想

● 儒教

- 中国の孔子（前551－479）の思想を継承する学派
- 権力による支配関係ではなく道德による教化関係として捉える
- 道德の実践を通じて理想的な人格を打出し、理想的人格を国家全体に及ぼす
- 合理主義的、現世主義的、人間主義的傾向
- 「天」：理想的な道（道德）を実践する者にたいして、自ずから援助を与えるような存在

● 孔子・孟子

- 天と人間性との間に宗教的關係を認める
- 内側からの道德的社會の実現を説いた

● 荀子

- 天と人間性との間に一線を画す
- 外側からの他律的規範としての礼による理想社會の実現を説いた

● 日本人はカミと仏を同一視したり、カミと天を同一視したり

※佐々木宏幹『神と仏と日本人——宗教人類学の構想』吉川弘文館、2010年

近世日本における儒教的道德思想

- 徳川家康が儒学に注目
- 林羅山（1583-1657）：朱子学を学び、礼と敬を重視
 - ・ 道德科の項目「家族愛・家族生活の充実」：父母や祖父母の敬愛、礼や敬につながる内容
- 朱子（1130-1200）：宋学の集大成者
 - ・ 宇宙生成の根本原理を「理」と呼んで、人間の感覚では把握しえない事物の背後にある実在と捉えた
 - ・ 「性即理」の哲学を説いた
- 中江藤樹（1608-1648）：朱子学に加えて陽明学も取り入れる
 - ・ 武士だけでなく万人に共通する道德の原理を「孝」に求めた

近世日本における儒教的道德思想

- 陽明学：明代の王陽明（1472－1528）による
 - ・ 人間の自然の心情を積極的に評価、本性＝理を実現できると説く
- 「孝」とは
 - ・ 「祖先崇拝を営むこと」、「家庭において子が親を愛し敬う（＝敬愛）こと」、「子孫一族が存続すること」の三つ
 - ・ それぞれ過去・現在・未来を貫く生命の連続性志向の社会的表現
 - ※佐々木宏幹『神と仏と日本人——宗教人類学の構想』吉川弘文館、2010年
 - ・ 現在生きている先祖だけでなく亡くなった先祖も含めて大事にするという観念
- 中江藤樹（1608-1648）
 - ・ 内村鑑三『代表的日本人』の中で「村の先生」として取り上げる
 - ・ 孔子の『大学』によって、将来の全生涯を決める大志を立て、謙譲に徹することを理想
 - ※内村鑑三著、鈴木範久訳『代表的日本人』岩波文庫、1995年

近世日本における儒教的道德思想

● 藤樹の言葉

- 「学者は、まず、慢心を捨て、謙徳を求めないならば、どんなに学問才能があろうとも、いまだ俗衆の腐肉を脱した地位にあるとはいえない。慢心は損を招き、謙譲は天の法（てんのり）である。謙譲は虚である。心が虚であるなら、善悪の判断は自然に生じる。」

- 虚：「昔から真理を求める者は、この語につまづく。精神的であることは虚であり、虚であることが精神的である。このことをよくわきまえないといけない。」

- 徳：「徳を持つことを望むなら、毎日善をしなければならない。一善をすると一悪が去る。日々善をなせば、日々悪は去る。昼が長くなれば夜が短くなるように、善をつとめるならばすべての悪は消え去る。」

※内村鑑三著、鈴木範久訳『代表的日本人』岩波文庫、1995年

近世日本における儒教的道德思想

- 利己心から免れていない人々について「獄の外に獄があり、世界を入れるほど広い。その四方の壁は、**名誉、利益、高慢、欲望への執着**である。悲しいことには、実に多くの人々が、そのなかにつながれ、いつまでも歎いている。」
- 「現代の私どもは、『感化』を他に及ぼそうとして、太鼓を叩き、ラッパを鳴らし、新聞広告を用いるなど大騒ぎをしますが、**真の感化**とはなんであるか、この人物に学ぶがよろしい」
※内村鑑三著、鈴木範久訳『代表的日本人』岩波文庫、1995年
- 藤樹が大切にした**謙譲の徳**
- 道德科の内容項目「**正直・誠実**」
 - ・ **カミに対して偽りのない心である清明心のみならず、この謙譲の徳にもつながる内容**

近世日本における儒教的道德思想

伊藤仁斎 (1627-1705)	『論語』や『孟子』の 古義を究明する古義学	呪術的宗教を否定
荻生徂徠 (1666-1728)	古文辞学	鬼神の存在は聖人の説いたことであるから否定できないが、聖人は民衆の「人情」に従って道を立てたのであり、支配階級と民衆との間には価値観のずれがある。
石田梅岩 (1685-1744)	心学（石門心学）	儒教、仏教、老荘思想、神道を取り入れて道德の実践を説く。（庶民を教化の対象とした倫理教化の体系）
二宮尊徳 (1787-1856)	農村の復興に取り組む	内村鑑三『代表的日本人』で、農民聖者として取り上げ、その中で「『自然』は、その法にしたがう者には豊かに報いる」という理を紹介。 倹約や勤勉性の徳：道德科の内容項目「 勤労 」「 公共の精神 」

※湯浅泰雄「かたち——日本思想の深層」『岩波講座 東洋思想』第16巻、1989年

内村鑑三著、鈴木範久訳『代表的日本人』岩波文庫、1995年

- 江戸時代中期：国学
- 本居宣長（1730-1801）：『古事記』を中心に研究
 - 『古事記伝』におけるカミ「凡て（すべて）迦微（かみ）とは、古御典等（いにしえのみふみども）に見えたる天地の諸（もろもろ）の神たちを始めて、其（そ）を祀（まつ）れる社（やしろ）に坐（いま）す御霊（みたま）をも申し、又、人はさらにも云ず（いわず）、鳥獸木草（とりけものきくさ）のたぐひ海山（うみやま）など、其余何にまれ（そのほかなににまれ）、尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳のありて、可畏（かしこ）き物を迦微とは云なり（いうなり）」
 - カミには様々あり、いずれもすぐれた徳を持つと神道を評価

近世日本における神道と仏教

- 江戸時代：庶民も仏教や儒教を受け入れやすい形で展開
- 寺檀制度：葬式仏教が確立
- 鈴木正三（1579-1655）の『万民徳用』
 - ・ 各々が自らの場で仕事に励むことこそが仏道修行である

武士日用	正直という徳用の樹立こそ武士の務めである
農民日用	農業に精励することがすなわち仏道修行である
職人日用	如何なる職業も一仏の徳用であれば、神聖ならざるはない
商人日用	営利の追求ということがいやいやしい、けがれた業ではない

※井上義巳『日本教育思想史の研究』勁草書房、1978年

鈴木正三について・・・

- 身分社会を認めながらも、それぞれの職分の持つ宗教的意義を発見しようとした
 - ・ 身分社会は民衆の力では変えることができないが、それぞれの環境において日々生活しながら救いを求められるという考え
 - ・ 民衆にとって希望を持つことができるもの
 - ・ 「修行者自身の心身の上に勇猛精進をあらわすことが『帰依』ということになる」
- 「勇猛精進の聖」
 - ・ 勇猛：意志的努力、硬固な意志の意味
 - ・ 精進：精根込めてひたすら励むことの意味
- 道徳科の内容項目「勤労」「公共の精神」

※井上義巳『日本教育思想史の研究』勁草書房、1978年

加藤みち子『勇猛精進の聖——鈴木正三の仏教思想』勉誠出版、2010年

鈴木大拙『大拙全集』第十九巻、岩波書店、1969年

- 明治時代：儒教は、個人の自由や権利を束縛する思想として批判
 - ・ 儒教：本来は人間の在り方の普遍的な原理を説くもの
- 明治維新後：神仏分離令、廃仏毀釈運動、仏教の無力化、神道の国教化
 - ・ 国家神道が天皇制国家主義の支柱
- 古代から江戸時代に至るまでの道德性（重層的）
 - ・ 正直・誠実の徳、自然愛護、畏敬の念：神道
 - ・ 相互理解・寛容：聖徳太子の『憲法十七条』
 - ・ 自律・責任、真理の探究：仏教
 - ・ 公正・公平の徳：鎌倉新仏教
 - ・ 勤労の徳：二宮尊徳や鈴木正三の考え方
- 「おかげさま」と「勿体ない」
 - ※鈴木大拙『大拙全集』第十九巻、岩波書店、1969年
- 日本的な道德性を次世代につなげていくことが重要

終わり

